

はじめに

本書は、韓日高齢者福祉研究会のメンバーを中心に執筆したものである。本研究会は、社会福祉分野、特に高齢者福祉分野における韓国と日本の学術的交流が活発に行なわれるよう架け橋の役割をすることやそれに関連する情報発信を目的に、韓国出身の研究者を中心に2020年に設立されたものである。コロナ禍において多くの研究会や学会に Zoom などのオンライン開催が広がっていった頃、Zoom であれば、日本全国各地にいる韓国人研究者同士で簡単に研究会を開催できることに着目し、コロナ禍に新しく始めたのである。

研究会の趣旨に賛同したメンバーが集まり、勢いよく始まったが、どのように進めていくべきか悩む時期が続いた。皆で議論を重ね、韓国にいる研究者をお招きして勉強する回、研究会メンバーの興味関心が近いテーマでグループを分け、合同研究・発表する回のほか、読書会など、様々な内容で進めてきた。そのなかでの議論や研究会前後の雑談などから、多くのメンバーに共通して浮かんだ疑問があった。

それは、「なぜ、韓国はそうなのか？」ということであった。海外で生活しているメンバーだからこそ、気になる韓国特有の事情も多くあった。例えば、深刻な高齢者貧困や死角地帯の問題など、誰もが社会課題であることに賛同しているにもかかわらず、なぜ解決の糸口が見えないのか。その他、総合社会福祉館や老人総合福祉館など、韓国の地域福祉を担う拠点機関として取り組んでいる各種事業・プログラムの成果について話し合うことも多くあった。

これらの背景には、韓国の脆弱な社会保障制度、特に社会保険制度が整っている一方でカバー範囲や対象者が限られているため、社会保険ではないもの（例えば、民間保険に加入しリスクに備える等）で補完している根本的な構造上の課題があった。一方で、韓国ならではの政治状況や各種市民団体による組織的な政治参画、良くも悪くもダイナミックに展開される福祉事業の取り組みなどから韓国特有の事象が発生していると考えた。

皆で研究会を重ねるにつれ、上述したような話し合いが深まり、「現代韓国の福祉事情」という今回の企画が決まった2022年から児童・障害者福祉分野、公的

扶助を専門にする研究者も新たに加わるようになった。みんなで本をまとめることは正直、簡単ではなかった。しかし、複数回の合宿を通してメンバー間の仲も議論も深めることができ、みんなで同じ方向を向くことができた。その陰で研究会の年長者の先輩方のリーダーシップがあったことを記しておきたい。特に本の企画から出版に至るまで金成垣先生の優しさと率直なコメントが飴と鞭になり、皆で一致団結することができたと考えている。

今後、研究会メンバーで続編を企画できるように、皆で切磋琢磨していきたい。

2024年9月24日

編者を代表して

金 圓景